

公開授業をしてみても

小谷田 文 彦*

人文学部では、2007年度に全学部の教員に対して公開授業を行った。私も公開授業の一つとして、2、3年生向けの「産業組織論」を公開した。ここでは、この経験を通じて「授業を教員に公開すること」に関して考えたことや感想を述べてみたい。

はじめにまとめると、私が公開授業を行って感じたことは以下の二点である。

- (1) 授業評価には、学生の視点、教員の視点の両方が必要である。
- (2) 授業を聖域化せず、授業に対して議論することが教育の質を高める。

以下においては、これらの点についてももう少し詳しく述べる。

公開授業の意義

公開授業には「他の教員の授業への不干渉」という不文律を改める効果がある。大学の授業は聖域になっており、ほとんどの教員は、他の教員がどのような授業をしているかを知らない。

学生による授業アンケートは、このような状況が教育上の問題を生じさせる危険に対する歯止めになるが、学生による評価は教員の授業の質を向上させるためには力不足である。なぜなら、学生による授業改善の要求が尤もなことであっても、それだけでは授業の改善は見込めないからである。あくまでも教員の授業改善のための意欲があってこそアンケートは生きるものであり、そうでない場合には力を持たない。そして、教員の自己改善意欲が無い場合には、学生アンケートに応えるために教員に対する何らかの組織的な強制力が必要となるが、これは違った問題を生じさせるであろう。

その一方で、教員からの評価となれば、これを簡単に無視することは出来ない。教員からの指摘は、学生からの指摘とは質が違っているからである。

専門家の指摘

教員からの指摘は、「教える立場からの指摘」と看做せる。この指摘は、「教わる立場からの指摘」よりも、より実践的かつ有用である。学生の指摘は多くの場合、その学生の主観による評価であり、客観性は望めない。学生の評価基準は、「自分にとって」授業が面白いのか、役に立つのか、という主観であり、そこには「どのように授業を組み立てるべきか」という「教える立場を客観的に評価する視点」は存在しない。

また、教員からの助言は、「専門家からの助言」でもある。そもそも、教え方や授業の組み立てを評価するためには、その学問分野の全体像を知らなければならない。そうであってこそ、効果的な授業方法を提案することが出来る。多くの学生は、その授業によって初めてその分野に触れることになるので、通常、各理論の学問分野全体における位置づけを授業の時点で知ることはない。学生の主観的な評価も大切ではあるが、教員からの助言はより即効性がある。よって、こちらの方が自発的な授業改善の誘因になり易いと考えられる。

*弘前大学人文学部

授業が聖域で無くなることに従い、各教員は自然に他の教員の授業内容を知ることになる。私は、関連分野の授業内容は知っておいた方が良く考えている。科目には、基礎科目、応用科目がある。そして、科目同士の関連性を意識することは、授業内容を考える上で決して損にならない。また、その関連した内容を「どのように教えているのか」は、自分の授業内容にも影響を及ぼす。例えば経済学の場合、基礎科目において数学を用いて経済現象を説明したかどうか、その後の応用科目の授業における理論の解説方法を変える。

そもそも、学問的内容が完全に一つの分野だけで独立している方が稀である。経済学においても、例えば「貿易の問題」は為替、金融、税制など多くの問題と独立には存在しない。現状において他科目との関連は授業の聖域化と共にほとんど関心が払われていないが、教員同士で授業を確認し合う場を作ることは、教育的効果も高めるはずである。

弘前大学の評価基準

弘前大学の評価基準は、はじめに、明確、理解、構成、説明、そして、準備、時間、満足となっている。これらの評価基準について、後半の準備、時間、満足は学生の主観的な判断を拠り所にしても良いであろう。しかし、前半の、明確、理解、構成、説明に関しては教員の評価がより効果的である。

もしその理論が難しいものであった場合、十分に「構成」を考えて「明確」に「説明」しても、学生が「理解」に達しないこともある。その場合、これらの評価は低いものになる。しかし、自分の専門に近い分野の科目なら、教員は、これらが適切に行われたのかどうかを学生よりも適切に判断できる。そして、もし授業に問題があったとしても、それならどうしたら良いのかという判断が出来る。授業内容に関するより良い代替案は、その分野を理解している者からしか得ることが出来ない。

学生による評価はあくまでも学ぶ立場からの視点であり、学問的意義と相反する可能性がある。上記の項目について学生の主観でのみ判定を下すと、教えるべきものが教えられず、授業内容が学生への迎合となる。主観的な評価では学術的な内容は問われることがない。声が通っているか、板書がきれいかについては評価できても、どのように教えるべきかについては評価できない。

そして、学ぶべき内容や、その理論にどの程度の意義があるのかは、学生よりも教員の方がより適切に判断できる。何が教えられるべきなのかは、役に立ちそうか、面白そうかで判断されるべきではない。学問は学ぶべき内容を学び終わり、それを十分に消化し、活用可能な場面に遭遇しない限りその意義を理解できないこともある。そして、それをどう教えるかについては、その分野に対する習熟と教育の経験が必須である。

ディスカッションの重要性

公開授業においては、その後の教員同士の話し合いが実り豊かな効果を生む。教員は専門が近い教員から、その分野に習熟しているからこそ出来る、習得への過程に関する技術的な提案を得ることが出来る。また、専門が遠い教員との意見交換からですら学問分野ごとの教授法の違いを知ることが出来、それを授業に活かすことが出来る。

また、個人的感想であるが、教員への公開授業は授業準備をより緻密にする。言葉は悪いが、学生は騙せても、専門家に対してはそうはいかない。このことは副次的に学生へも良い影響を生む。授業内容が精緻になることによって、学生の誤解が少ない授業をすることが出来るからである。これは学生の理解を高めることにもなる。

教育水準を高めることに関する意識改革は、学生からの評価だけではなく、授業を聖域とせず公開し、教員同士が議論することによって成される。各教員が近接分野の各授業との関連を考え、授業内容や教授方法を意識し忌憚なく意見を交わせるようになれば、自ずと授業の水準は上がり、学生の満足も向上する。しかし、これは授業を行う側からすれば大変な苦勞を伴う。この試みを軌道に乗せるために

は、何らかのインセンティブを教員に与えることも必要かも知れない。

以上の文章は、平成19年6月9日（土）から6月10日（日）に行われた、平成19年度（第4回）弘前大学FDワークショップにおける「公開授業をしてみて」に加筆修正を加えたものである。